水泳部
競泳

1931(昭和6年)　三田綱町プール(1930年完成)にて、野田一雄主将ら当時のメンバー。

1932(昭和7年)　第10回ロサンゼルス・オリンピック100メートル自由形銀メダル達成直後の河石達吾。

1936(昭和11年)　第11回ベルリン・オリンピック1500メートル自由形金メダルの寺田登の力泳。

1938(昭和13年)・6・5　第12回早慶戦入場式。旗手は宮崎康二。

1902　体育会5番目の部として創立。

1921　「三田水泳会」創設。会長名取和作。／9・10〜11 大学対抗競泳大会(インカレ)始まる。今村栄三、益田弘、野村佐多雄、浅野均一らが出場。

1924・9・13〜14　第3回インカレ野村佐多雄、400自由形優勝。松島武夫、今村栄三らが出場。団体3位。

1926・9・18〜19　第5回インカレ野田一雄100・800自由形優勝。団体3位。野田は浜名商時代400・800・1500自由形の日本記録保持者。

1927・6・12　第1回早慶対抗水上競技大会を芝公園プールにて開催。48対88で敗れたが黄金時代の早稲田に対し、プールも持たず、中学時代に競技歴があるのは野田一雄だけという本塾は他校に驚異を与えた。／9・24〜25　第6回インカレでは2位に躍進。プール建設の気運盛り上がる。

1928　第9回オリンピック・アムステルダムで開催。野田一雄出場。

1929　第8回インカレ。岩崎忠雄、山本晴武、野田一雄、河石達吾、根来幸成、大串泰三ら出場し3位。陣容も充実。

1930　高橋誠一郎、内海勝二会長ほかOBの尽力により三田綱町プール竣工。同年明治神宮プールも完成し、早慶戦・インカレともに会場を移す。

1932　第10回オリンピック・ロサンゼルス。野田一雄、河石達吾出場。河石は100自由形銀メダル。宮崎康二(浜松一中・100自由形金メダル)、小池禮三(沼津商・200平泳銀メダル)は後に本塾へ入学。

1933　三田綱町に合宿開始。(内海会長邸内)。／6・11　第7回早慶戦、小池禮三は200平泳で世界新記録樹立(2分44秒2)、翌年極東オリンピック(マニラ)に出場。

1935・6・9　第9回早慶戦、小池禮三は200平泳で世界新記録樹立(2分42秒8)。

1936　第11回オリンピック・ベルリンで開催。役員に根来幸成、選手に小池禮三(200平泳3位)、寺田登(1500自由形1位)、宮崎康二、児島泰彦が出場。赫々たる戦績をベルリンの地に印す。

1938・6・5　第12回早慶戦100自由形宮崎康二、高尾龍実、200自由形島本信美、400自由形高橋弘、寺田登、1500自由形高橋、寺田、片山崇、200平泳小池禮三、長久俊三、100背泳児島康彦、と上位入賞、800継泳1位となり早稲田に初勝利を飾った。／9・17〜18　第17回インカレでも念願の初優勝を遂げ、黄金時代を築きあげる。

1941・12・8　太平洋戦争起こる。

1942　第21回インカレ200自由形川村甚平1位。

1943　第17回早慶戦を最後に水泳競技も中止となる。戦線は拡大。

1983(昭和58年)・6・11　第55回早慶戦。45年ぶりの優勝を決めた最終レース(800継泳)直後の歓喜。

1938(昭和13年)・6・5　第12回早慶戦。28対11で念願の初優勝。優勝楯を持つ小池禮三主将ら黄金時代のメンバー。(神宮プール)

1991(平成3年)・5・27　水泳部新日吉合宿所完成。

1945　終戦間近、片山崇(特攻隊)の悲報に接する。三田・内海邸内合宿所全焼。／8・15　終戦。小池禮三などが中心となり競泳の復活を図る。

1946　綱町弓道場を借りて合宿。妙中要造、岩崎粂郎、藤井敬次郎、柴山太郎、赤樫卓爾らが練習を開始。／7・7　第18回早慶戦、東伏見にて再開。／9・7～8　第22回インカレ、日大プールにて再開。

1947　第23回～第25回インカレまで藤井敬次郎、吉永清、上杉猛、赤樫卓爾、小池哲夫、白井孝らの活躍で団体3位。

1948　50メートルプールを求めて三鷹合宿所(旧中島航空機少年寮)に移り三鷹プールで練習。食糧難の時代。

1950　日米対抗競技開催。清水敏夫出場。

1954　川崎へ合宿所移転。岩崎忠雄、有吉正太郎先輩らの全面的な支援による。大師プールで練習。

1956　第16回オリンピック・メルボルンで開催。二宮英雄(背泳)、古川徹(宮之城高校後に本塾入学)出場。小池禮三競泳コーチで参加。

1959　水泳部日吉合宿所完成。多数の先輩の援助による。

1960　日吉プール(50メートル)竣工。及川恒忠部長らの尽力による。計画より20年経過。第17回オリンピック・ローマで開催。清水啓吾(自由形)出場。赤樫卓爾競泳コーチで参加。

1962　高嶺隆二400個メで日本記録。

1963～1968　第39回～第44回インカレまで団体出場はするが、下位低迷。

1969～1980　選手獲得も難しく、部創立以来最悪の時代が続くが、諸先輩方及び付属高校からの選手達が再建の努力をする。

1981　第57回インカレに10年ぶり団体出場。

1982　渋谷浩志50背泳で日本記録。

1983・6・11　第55回早慶戦45年ぶりに優勝。伊藤拓(自由形)、花内誠(個メ、自由形、バタフライ)、吉岡正人(平泳、個メ)、川村明(バタフライ)、重信和行(自由形)、正山大(自由形)、良知浩(平泳)らが得点を重ね、最終800継泳では100分の1秒差で早大を抑え、37対32で勝利を飾った。

1985　第13回ユニバーシアード、神戸で開催。国代竜一出場。400継泳で日本記録。

1986　新日吉合宿所建設の募金活動開始。

1988　第24回オリンピック・ソウル。福山信義日本団の総務主事として参加。

1991・5・27　新日吉合宿所竣工。塾当局及び多くの先輩方の絶大なる支援による。／7・24～26　第64回関東インカレ男子は団体出場権獲得、女子は2部3位。／9・1～3　第67回インカレ4年ぶりの団体出場。

飛込

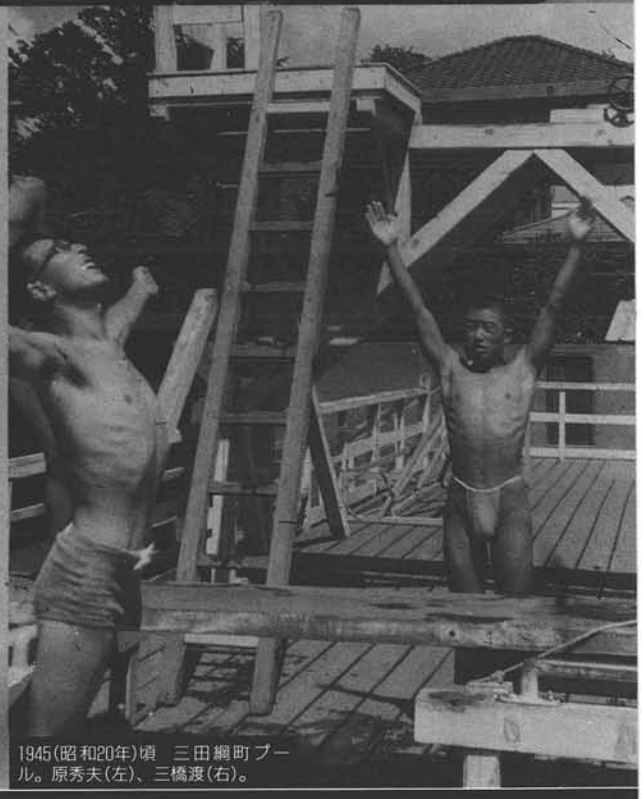
昭和10年代。

1939(昭和14年)　神宮プールにて。前列左より矢野幸松、小笠原義郎、後列左より佐藤修正、北田舜次(鳥居大路)、橋本憲一、岩佐道雄。

昭和10年代。

昭和10年代。

昭和10年代。



1945(昭和20年)頃　三田綱町プール。原秀夫(左)、三橋渡(右)。

1920年代　飛込は施設が少なく、クラブ選手を中心に発達してきたが、大正末期頃から競技会が開かれるようになり、日本選手権やインカレを中心に変化し始めていった。本塾における飛込の草分けとなる選手もYMCAや玉川プールを中心に練習を重ね、試合に参加していた。

1926　日本選手権、高飛2位芥川安。

1927　日本学生、飛板2位清水治、3位伊沢光四郎、高飛1位伊沢、総合2位。

1928　日本学生、飛板1位清水、3位福田、高逆飛1位石田英勝、2位伊沢、総合優勝。日本選手権、高飛2位原西三。

1929　日本学生、飛板1位清水、2位原西三、混合1位原秀夫、2位坂巻仁次、高逆飛1位原西三、総合3位。日本選手権、飛板2位清水、高飛2位石田。

1930　日本学生、飛板1位原西三、混合1位奥平俊二、高逆飛1位原西三、2位奥平、総合優勝。日本選手権、飛板3位原西三。極東選手権、飛板1位原西三。全国飛板、飛板A1位原秀夫、高逆飛B3位杉原雪夫(普)。

1931　日本学生、飛板1位原西三、2位原秀夫、高飛3位原秀夫、高逆2位奥平、3位原西三、総合3位。日本選手権、飛板2位原西三、3位原秀夫、高飛3位原秀夫。

1932　日本学生、飛板2位原秀夫、3位原西三、高飛1位原秀夫、高逆飛2位杉原、3位清水、総合3位。塾OB石田英勝ロサンゼルスオリンピックに出場、高飛で8位に入賞する。

1933　日本学生、飛板1位原秀夫、3位杉原、高飛1位原秀夫、3位奥平、総合2位。日本選手権、飛板2位原秀夫、3位原西三、高飛1位原秀夫、3位奥平。

1934　早慶戦、初めて飛込が独立した対抗競技となる、慶大31－18早大。全国学生、総合3位。

1935　早慶戦、慶大8－4早大。日本学生、高飛3位伊藤真吉、高逆飛2位杉原、3位伊藤、総合2位。

1936　早慶戦、慶大22－22早大。日本学生、飛板1位片岡弘吉、2位杉原、高飛1位伊藤、2位片岡、高逆飛2位伊藤、総合優勝。日本選手権、飛板3位片岡、高飛3位伊藤。日本中学、飛板2位溝口喜久男。ベルリンオリンピック監督、OB原秀夫。

1937　早慶戦、早大28－16慶大。日本学生、高飛3位伊藤、混合1位北田舜次。

1938　早慶戦、早大29－14慶大。日本学生、飛板3位北田、高飛3位矢野幸松。

1939　早慶戦、早大27－17慶大。日本学生、混合3位矢野、総合3位。

1940　早慶戦、早大11－11慶大。日本学生、高飛2位佐藤修正、混合2位奥島経一郎、総合2位。

1941　早慶戦、慶大23－21早大。東京学生、飛板3位岩佐道雄、高飛3位佐藤、混合3位奥島。

1942　早慶戦、慶大31－12早大。日本学生、飛板1位橋本憲一、3位岩佐、高飛3位佐藤、混合1位慶應(橋本・岩佐・佐藤)。

1943　戦況が激しくなり、飛込競技は順下の

原西三、還暦記念のダイビング(10メートル)

1979(昭和54年)

1965(昭和40年)

1967(昭和42年)

1969(昭和44年)　三田綱町プール。ダイビングのメンバーと最盛期のシンクロチーム。

後20メートル泳ぐ渡渉をイメージした国防飛込となる。早慶戦、慶大30−14早大。神宮大会、国防飛込1位村上昌二。
1946　日本学生、総合3位。
1947　早慶戦、慶大24−16早大。日本選手権、高飛3位三橋渡。
1948　早慶戦、慶大24−18早大。日本学生、総合2位。
1949　早慶戦、慶大9−4早大。日本学生、飛板2位谷島弘通、3位森沢厚、高飛2位森沢、総合2位。
1950　早慶戦、慶大9−3早大。日本学生、飛板2位森沢、3位神原昭三、高飛1位森沢、総合2位。
1951　早慶戦、慶大8−4早大。日本学生、飛板2位森沢、総合2位。日本高校、1メートル3位向勉。国体、飛板2位森沢、高飛3位小河原正光。
1952　早慶戦、慶大7−5早大。日本学生、飛板1位森沢、高飛3位森沢、総合4位。日本選手権、飛板2位森沢。国体、飛板2位森沢。ヘルシンキオリンピック監督、OB原秀夫。
1953　早慶戦、早大8−4慶大。日本学生、総合3位。
1954　早慶戦、早大8−4慶大。日本学生、総合3位。
1955　早慶戦、早大7−5慶大。日本学生、高飛3位木村安晴、総合3位。
1956　早慶戦、早大12−0慶大。
1957　早慶戦、早大11−1慶大。
1958　早慶戦、早大9−3慶大。
1959　早慶戦、早大8−4慶大。
1960　早慶戦、早大8−4慶大。
1961　早慶戦、早大11−0慶大。室内選手権、1メートル3位水野雄之。
1964　日本学生、総合4位。日本高校、高飛2位吉村正男。
1965　早慶戦、早大8−4慶大。日本高校、飛板2位吉村。国体、飛板2位藤本秀一。
1966　早慶戦、慶大6−6早大。
1967　早慶戦、早大10−2慶大。
1968　早慶戦、早大10−2慶大。
1969　早慶戦、慶大6−6早大。
1971　早慶戦、早大8−4慶大。日本学生、飛板2位小木加津子。
1972　早慶戦、早大11−1慶大。
1973　早慶戦、早大6−6慶大。
1974　早慶戦、早大8−4慶大。
1975　早慶戦、慶大7−5早大。
1976　日本学生、総合3位。
1977　日本学生、女子総合4位。
1978　日本学生、女子総合5位。室内選手権、1メートル2位藤川きよみ。
1979　日本学生、飛板2位藤川、女子総合3位。ジャカルタ国際、飛板2位藤川、高飛1位藤川。室内選手権、1メートル2位藤川。
1980　日本学生、飛板1位藤川、女子総合2位。室内選手権、1メートル2位藤川。
1981　早慶戦、早大5−1慶大。
1982　早慶戦、早大3−2慶大。
1983　早慶戦、早大3−2慶大。

水球

1940(昭和15年)　明治神宮水泳大会。慶大２－０早大。早大シュートを止める慶大ゴールキーパー岡田。

1934(昭和９年)　リーグ戦、早慶戦、インカレ選手権、全日本選手権、全優勝。

1939(昭和14年)　リーグ戦、早慶戦、インカレ選手権、全日本選手権、全優勝。前列左より主将和田、岡田、名取、石原。後列左より中村、松本、河原田。

水球競技は1860年にイギリスのポロクラブハウスで発祥し、10年後に公式競技ルールが出来上がり、ヨーロッパ全土で、続いてアメリカでも盛んに行われるようになりました。

オリンピック大会では第２回パリ大会(1900年)より行われ、現在ユニバーシアード大会、アジア大会でも正式競技種目として盛大に行われるようになりました。

我が国では1910年慶應義塾大学のＴ・ウイード先生が、イギリス・アメリカより水球競技解説書を取り寄せられ慶應義塾大学水球部に取り入れました。

1915年(大正５年)慶應義塾大学水泳部水球部門が正式に創部され練習を始めました。部門内のゲームだけではどうしても満足出来ず、対外相手のチームを探していたところ、横浜の外人クラブ(ＹＣＡＣこと横浜カントリーアスレチッククラブ)にウォーターポロチームがあることを聞き、早速試合を申し込んだところ、快く引き受けてくれました。

同年７月に新築された水泳部葉山寄宿舎にＹＣＡＣチームを招き、葉山海岸に競技場を設け、ウイード先生のレフェリーにより、初めて対戦しましたが残念ながら９対０で初戦を飾ることは出来ませんでした。

横浜の根岸競馬場のそばにＹＣＡＣのマリンクラブハウスがあり、1917年より毎年２回～３回の招待ゲームが行われ、海岸にコースラインを引いた競技場で、激戦が繰り広げられました。毎年惨敗続きでしたが1923年になり大正４年塾の水球チーム結成以来初勝利(２対０)を納めることが出来ました。

この相互親善招待ゲームは横浜と葉山の試合場で1933年(昭和８年)まで盛大に行われました。

以来、慶應義塾大学水泳部水球部門は82年間国内はもとより国際競技会にも、日本水球界の普及と競技力向上のために尽力をして来ました。

オリンピック大会、ユニバーシアード大会、アジア大会、世界ジュニア大会、ヨーロッパ遠征等に慶應義塾大学より数多くの選手、役員が日本代表選手団に選ばれ活躍して参りました。

■国際競技大会

●オリンピック大会

1932　ロスアンゼルス。木村清兵衛・沢海東助

1936　ベルリン。和田幸一・高橋三郎

1960　ローマ。佐藤孝尚、山本健、清水洋二　神田明善(コーチ)

1964　東京。荒川八郎、清水洋二、神田明善(コーチ)

1968　メキシコ。神田明善(アジア代表国際審判員)

1972　ミュンヘン。峰岸直人、平井顕吉(国際水球委員)

1941(昭和16年)　早慶戦優勝メンバー。前列左より五百木、西谷、後列左より神田、多田、松本、塚本、岡田。

1943(昭和18年)　全国学生選手権、インカレ優勝楯、リーグ戦優勝カップ、早慶戦勝利女神トロフィー、室内大学選手権優勝賞状。

1943(昭和18年)　インカレ優勝メンバー。慶大5－0早大。前列左より松本、岡田、守屋、後列左より多田、塚本、神田、中村。

1948(昭和23年)　国民体育大会優勝東軍メンバー。前列左より伊藤、加島、田島、後列左より神田、五百木、宮部、植中。

1955(昭和30年)　リーグ戦優勝メンバー。前列左より市毛、藤野、伊藤、後列左より寺田、山本、荒川、佐藤。

1952(昭和27年)　3年連続全日本優勝。前列左より、加島、植中、田島、後列左より伊藤、市毛、藤野、平井。

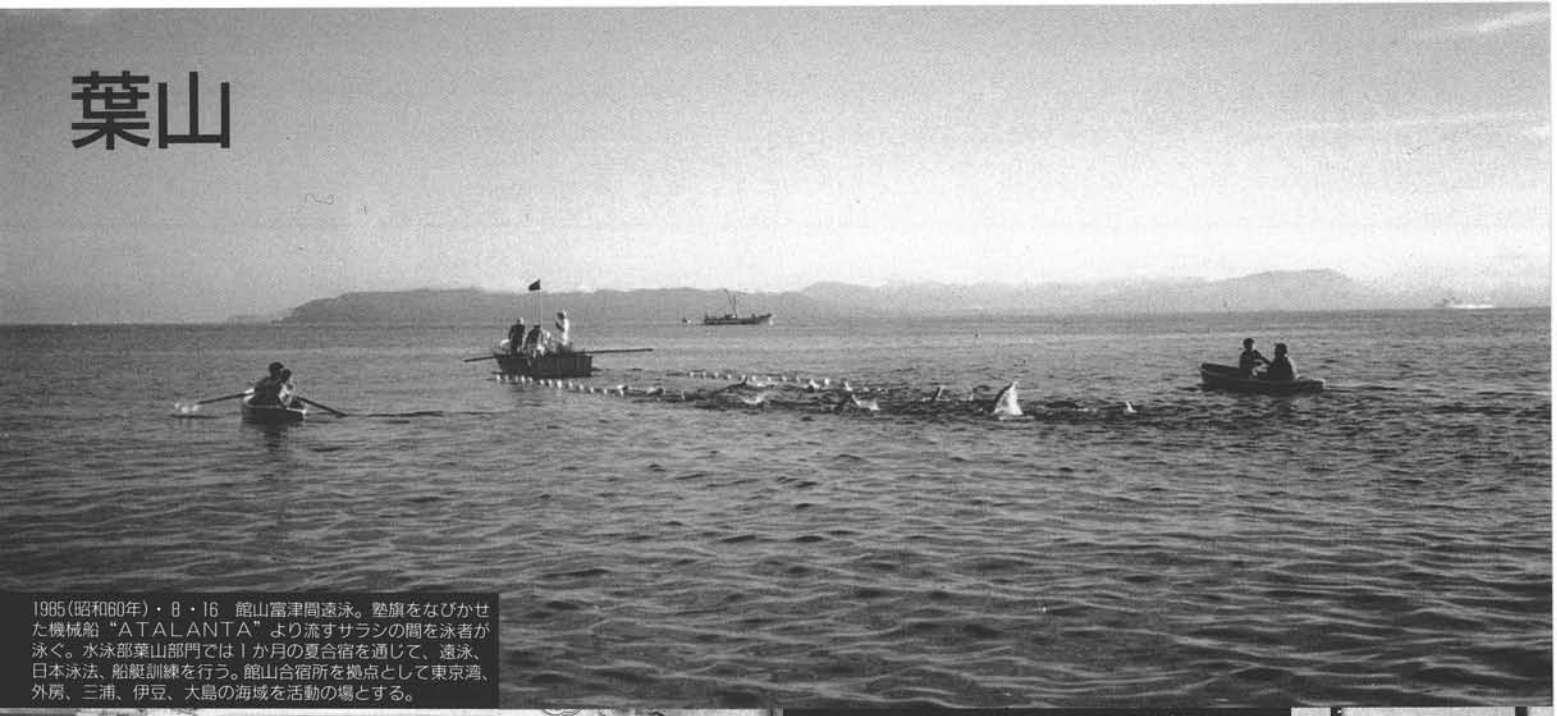
1939(昭和14年)　早慶戦。神宮プール。

1955(昭和30年)　早慶戦。慶大5－0早大。

1957(昭和32年)　ユニバーシアード・パリ大会。選手団旗手、慶大佐藤孝尚。

●ユニバーシアード大会
1959　パリ。佐藤孝尚(日本選手団旗手)
1961　ソフィア。清水洋二、井上宏、神田明善(監督)、名取正也(審判)
1963　ポートアレグレ。井上宏、住谷栄之資、村瀬友三郎(審判)
1981　ブカレスト。竹末泰士
●アジア大会
1954　マニラ。神田明善、田島直季、市毛弘文、佐藤孝尚、和田幸一(監督)
1958　東京。佐藤孝尚、荒川八郎、神田明善(コーチ)
1962　ジャカルタ。荒川八郎、清水洋二、井上宏、神田明善(監督兼選手)、名取正也(審判)
1966　バンコック。清水洋二、住谷栄之資、神田明善(国際審判員)
1970　バンコック。峰岸直人、平井顕吉
1974　テヘラン。峰岸直人、大貫利和
1982　ニューデリー。神田明善(国際審判員)
●世界ジュニア水球選手権大会
1983　バルセロナ。神田明善(監督)
●ヨーロッパ遠征
1963　荒川八郎、清水洋二、小山欣也、神田明善(監督)、名取正也(審判)
●韓国遠征
1963　佐藤孝尚(監督)、滝野貝伸・竹野内正彦(コーチ)、選手9名
1991　佐藤孝尚(監督)、田島直季(コーチ)選手28名
●平井顕吉(塾30年経済卒)
1972　国際水泳連盟水球委員
1980　国際水泳連盟水球名誉理事
1984　国際水泳連盟水球副委員長
1988　国際水泳連盟水球委員長
■国内競技会
●慶大・早大対抗戦
63戦、慶大の39勝24敗
●日本水泳選手権大会
1924～　優勝、11回(1928、37、38、39、40、41、50、51、52、53、73)。準優勝、19回。第1回優勝の東京ウォーターポロクラブには塾生数名参加しています。
●日本学生選手権大会
1927～　優勝、11回(1927、29、38、39、48、51、52、53、54、64、72)。準優勝、6回。
●関東学生水球リーグ戦
1930～　優勝、19回、準優勝、27回(春秋リーグを含む)。
●日本高校水球選手権
優勝、4回(1949、50、56、57)

葉山



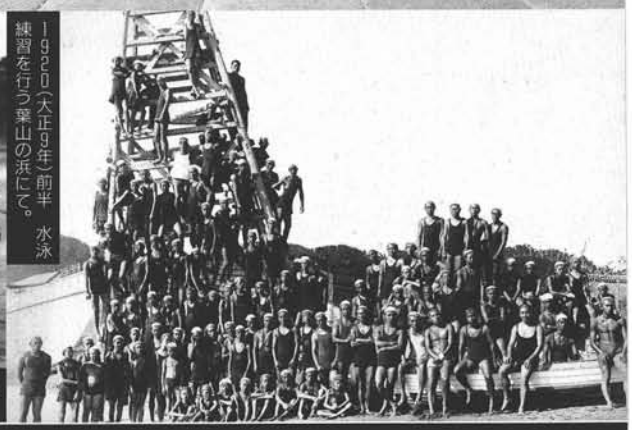
1985(昭和60年)・8・16　館山富津間遠泳。塾旗をなびかせた機械船“ATALANTA”より流すサラシの間を泳者が泳ぐ。水泳部葉山部門では1か月の夏合宿を通じて、遠泳、日本泳法、船艇訓練を行う。館山合宿所を拠点として東京湾、外房、三浦、伊豆、大島の海域を活動の場とする。

1900年代後半　水泳部創部当時、葉山相福寺にて。

1915(大正4年)　葉山寄宿舎新築祝賀会葉山寄宿舎娯楽室にて。

1918(大正7年)　葉山寄宿舎。手前は2段ベッドルーム、奥に食堂および娯楽室。

1924(大正13年)　大抜手雁行。左側の海に設置した水球練習場。後ろに塾旗たなびく櫓。



1920(大正9年)前半　水泳練習を行う葉山の浜にて。

1887頃　水泳倶楽部設立。芝浦辺りにて活動。
1901　自尊党と称し、神奈川県富岡(長昌寺)にて水泳練習を行う。
1902・7・12　葉山相福寺にて第1回水泳練習会。／7・15　葉山逗子間3哩遠泳。(15名参加、7名完泳1時間35分)。体育会加入。
1903　葉山水泳部と称す。第2回水泳練習会を鍵屋にて行う。第1回葉山江ノ島間10哩遠泳を行う(22名参加、5名完泳7時間30分)。
1904　このころより水上運動会始まる。
1906　葉山鎌倉間6哩遠泳を行う。
1907　第6回水泳練習会葉山相福寺にて。名島海岸間、葉山逗子間、葉山江ノ島間の3つの遠泳を行う。
1908　部員が多くなり相福寺・清浄寺に別れて合宿する。高橋誠一郎部長就任。
1909　静岡県袖師海岸にて合宿。
1910　相福寺にて第9回水泳練習会。このころよりユニフォーム着用しはじめる。水球練習開始。
1912　このころよりセーリングボート始める。活動は遠泳に加え、日本泳法の錬磨研究、操艇法訓練行う。
1913　競泳練習開始。
1915・7・25　相福寺前に葉山寄宿舎が完成新築祝賀会開催。(ベッド120)／8・15　横浜外人チームとポロの試合を行う。
1926・7・8　葉山寄宿舎増築完成披露。
1930・6　網町プール落成式。部歌“灼熱炎天”出来る、作詞佐藤潔部長。
1932　葉山がヨットレースを主催。
1934　水泳部が4部門に完離。
1937・12　ヨット部が独立。
1939・7・30　第1回初島熱海競泳大会参加。
1941　学徒動員のため部員数激減。葉山にて合宿を予定するが県外合宿禁止令が出されて中止。
1942　県外合宿禁止令解け、合宿再開。合宿実施するも沖合500メートル以上は出られなかった。
1943　夏合宿終了後、寄宿舎軍用徴収。
1946　終戦後再開。プール練習のみ10名程度参加。／9・5　葉山寄宿舎返還されるも、荒廃はなはだしく食堂以外は使用不能。
1947　合宿再開。
1949・7　合宿所復興落成記念会。各学校の学生水泳実技指導行う。／8・4　第2回初島熱海間団体競泳大会12キロメートル2位。機械船“葉山”ベカ購入。
1951　寄宿舎女子寮竣工。
1955・8・17　第8回初島熱海競泳大会優勝。
1956・8・19　第1回日本泳法大会参加。
1957・7・31　第52回葉山江ノ島間最後の遠泳を行う。
1958　館山合宿所へ移転するまでの間、防衛大学に葉山部門所有の船をあずける。
1961・7・30　第8回東京湾横断遠泳大会(金

1949(昭和24年)・7　葉山合宿所復興落成記念会。葉山合宿所娯楽室にて。左奥にヨット“INDEPENDENCE”号(1918年建造)。右奥にヨット“SELF-RELIANCE”号(1924年建造)。

1953(昭和28年)　葉山合宿所。食事風景。

1964(昭和39年)　館山慶應浜にて。合宿解散時の船の後片付け。

1969(昭和44年)・8・11　塩見岩井間15キロメートル遠泳。慶應浜を出発したところ。右後に“葉山II世”。平泳ぎにて隊伍を組んで泳ぐ。

1920年代後半　葉山海岸にて櫓から逆飛込。

1976(昭和51年)　館山慶應浜(塩見)櫓にて。

1974(昭和49年)・8・8　下田大島間40キロメートル遠泳。初の海峡横断遠泳。3名完泳9時間55分、小泉体育賞受賞。

1980(昭和55年)・7・29　江ノ島熱海間43キロメートル遠泳。5名完泳12時間5分、小泉体育賞受賞。遠泳中の食事風景。

1983(昭和58年)・7・24～26　下田大島白浜館山間125キロメートル3日間連日遠泳(慶應125周年)。計19名完泳、小泉体育賞受賞。参加者全員が隊伍を組んでゴールの館山慶應浜に向かう、慶應浜沖ゴール直前。

1984(昭和59年)　最近の館山合宿所の生活。朝の塾旗掲揚(合宿中は朝、塾旗を揚げて、夕方に降ろす)。

朝食時、当番が自作の天気図で天気予報。
練習前の指示風景。

水泳練習。

夜のミーティング。

谷一観音崎12キロメートル)優勝岡田。葉山水泳部寄宿舎閉舎式。

1962・7・16　館山合宿所一期工事竣工披露式。／7・29　第9回東京湾横断遠泳大会優勝岡田。／8・25　第7回日本泳法大会2位佐藤一夫。女子の部優勝森。

1965・8・1　東京湾継泳競技大会(横須賀)優勝。／8・4　第18回初島熱海大会優勝。

1966・6・12　館山合宿所二期工事竣工式。／8・7　第13回東京湾団体継泳大会優勝。

1967・7　現ベカ購入。

1968・7　機械船“葉山II世”購入。

1970・8・2　第17回東京湾横断遠泳大会個人優勝永野。／8・23　第15回日本泳法大会2位今村。

1973・8・26　第18回日本泳法大会3位永野。

1974・8　機械船“ATALANTA”購入。

1976・8・8　第1回全国遠泳大会(江田島10キロメートル)2位。

1977・7・27　大島館山間49キロメートル遠泳(1名完泳13時間30分)小泉体育賞受賞。

1979・8・5　第1回鳥羽遠泳大会10キロメートル優勝。／8・12　第4回全国遠泳大会優勝。小泉体育賞受賞。

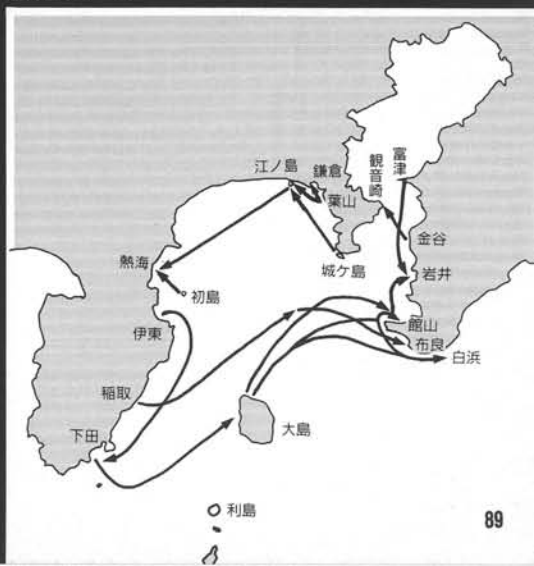
1982・7・27　伊東下田間40キロメートル遠泳(6名完泳11時間45分)小泉体育賞受賞。

1985・8・4　第38回初島熱海競泳大会優勝。12連勝飾る。／7　機械船“MUSE”購入。

1986・8・10　第11回全国遠泳大会優勝。

1987・8・12～13　稲取城ケ島沖布良間連日100キロメートル遠泳(完泳計13名)。

1989・7・30　第14回全国遠泳大会(これ以降駅伝方式で館山にて開催15キロメートル)2位。／8・9～10　富津岩井城ケ島江ノ島間連日50キロメートル遠泳(3名完泳)。

1990・8・12　大島館山間53キロメートル遠泳(5名完泳13時間3分)小泉努力賞受賞。

歴代遠泳コース。